友人選択と学業成績の関連の時系列的変化にみられる自己評価維持機制^{1,2}

愛知教育大学 磯崎 三喜年
広島大学 高橋 超

Self-evaluation maintenance processes in time sequential changes of relations between friend choice and school performance

Mikitoshi Isozaki (*Department of Human Relations, Faculty of Education, Aichi University of Education, Kariya, Aichi 448*) and Susumu Takahashi (*Research Center for Educational Study and Practice, Faculty of School Education, Hiroshima University, Minami-ku, Hiroshima 734*)

The purpose is to elucidate the sequential change in relations between students' friend choice and their school performance in terms of self-evaluation maintenance model. One hundred and thirty-five elementary school children and one hundred and twenty junior high school students were used as subjects of this survey. On the two questionnaires, each student was asked how he rated his own school performance, that of his friend, and that of his distant classmate, on both the high and low relevant subjects. According to the result of the survey, most students changed the combinations of each factor (relevance, closeness, school performance) in order to maintain their desirable self-evaluation. A time sequential analysis showed that students' self-evaluation maintenance processes were not so much based on their own ratings of school performance as on actual grades. It also showed that self-evaluation maintenance and personality traits were related to each other: As for elementary school children, their personality traits were related to the ratings of their own school performance and of their friends' school performance.

Key words: self-evaluation maintenance, strategies, social comparison, friend choice, personality, school performance.

人は、多くの場合、自己のよさを感じとり、自己の価値を高めようとしている。したがって、自己のよさを感じとれなくなるような状況では、そうした状況を回避し、自己のよさを維持できるよう認知や行動を変えようと考えられる。本研究は、Tesser (1984) による自己評価維持 (self-evaluation maintenance: SEM) モデルの視点から、児童・生徒の友人選択と学業成績および教科の関与度の関連の時系列的変化による自己評価維持機制を検討しようとしたものである。

SEM モデルは、人はポジティブな自己評価を維持しようと動機づけられているとの基本的前提にたっている。ここでの自己評価とは、個人が自分自身に対して抱いている、あるいは、他者が自分に対して抱いているとその個人が認知する相対的なよさをさす。こうした自己

評価は、次のような過程をへて上昇したり下降したりするという (例えば磯崎, 1989; 山口, 1990 など参照)。

ひとつは、自己にとって心理的に近い [自己とユニット関係 (Heider, 1958 大橋訳, 1978) にある何らかのつながりがある] 他者のすぐれた遂行によって自己評価が引き上げられる場合である。これを反映過程という。これとは逆に、心理的に近い他者のすぐれた遂行によって自己評価が引き下げられる場合がある。これを比較過程という。

こうした相反する過程のいずれが生起するかは、その活動内容が自己にとってどのくらい重みをもっているかによって決まってくる。こうした重みを関与度という。関与度が低いとき、心理的に近い他者のすぐれた遂行は自己にとって脅威とはならず、心地よいものでさえある。しかし、関与度が高いとき、それは自己にとって脅威をもたらしがちになる。そして、自己が相対的に劣っていると知覚せざるをえない状況では比較過程が生起し、自己評価が低下することになる。自己評価の低下は

¹ 本研究は、文部省科学研究費助成 (課題番号 62710048) を得て行われた。

² 本研究の一部は、1987-1989 年日本心理学会第 51-53 回大会において発表された。

不快感をもたらし、人は自己評価を維持すべくその解消へと動機づけられる。例えば、人は、他者との心理的な近さ、他者および自己の遂行、さらには関与度を変えようと努力すると考えられる。これが SEM モデルの基本的な考え方である。

なお、ここでは自己評価そのものは測定されていない。自己評価は、近さ、関与度、遂行という諸変数間の関係から理解し得るよう構成された理論的仮説体である。この点について、Tesser, Millar, & Moore (1988) は、自己評価維持の概念は、Festinger (1957 末永監訳, 1965) による不協和低減が認知的不協和理論の仮説的過程であるように、ひとつの仮説的過程と考えられるとしている。つまり、不協和低減も自己評価維持もいずれも直接測定したり観察したりできないが、仮説的過程の観察しうる先行因と観察しうる結果に関して、ある特定の予測をなすことが可能であり、その意味で検証可能なのである (Tesser & Campbell, 1983)。

モデルの妥当性は、すでにいくつかの研究によって実証されている (例えば、Tesser, Campbell, & Smith, 1984)。では、自己評価を維持するために、現実にならなければならないような方略を用いるのであろうか。あるいはその有効性はどうだろうか。自己評価維持モデルは、力動性と体系性をその特徴としているが、自己評価維持機制の力動性やそこで用いられる方略およびその有効性については、十分な検討はなされていない。それには、同一対象者に時系列的な調査研究を行う必要がある。

本研究では、友人関係と学業成績の関わりから、自己評価維持機制の力動性とそこで用いられる方略の有効性を検討し、モデルの検証を試みることにする。すでに、磯崎・高橋 (1988) は、友人選択と学業成績の関連から自己評価維持機制を検討している。ここでは、それから一定期間経た後の時系列的な資料の収集により、友人選択と学業成績、科目の関与度の力動的な変化を探り、自己評価維持の方略パターンによる自己評価維持傾向の違いを調べることとする。

SEM モデルから予測される基本的仮説は以下のとおりである。学業成績の評定および実際の学業成績においては、自己にとって関与度の高い科目では、自己が友人よりもすぐれており、関与度の低い科目では、友人が自己よりもすぐれているであろう。時系列的にみても、この傾向は基本的に変わらないであろう。自己評価維持の方略パターンの有効性については、モデルから明確な仮説を導くことはできないため、探索的に検討を行う。心理的に近い他者と遠い他者とは、フィールド研究と実験室的研究とで結果が異なるため、ここではモデルに基づく仮説は特に設けない。

また、自己評価維持機制の個人差要因については、すでに自尊心との関係から検討がなされている (Tesser et

al., 1984 など) が、劣等感や内 (外) 向性などのパーソナリティ特性は、他者との関わり方や友人関係のあり方と密接に関係していると推測される。ただし、モデルから、これらパーソナリティ特性と自己評価の維持に明確な仮説が立てられるわけではない。したがって、ここでは劣等感や内 (外) 向性などのパーソナリティ特性と自己評価維持との間になんらかの関連がみられるであろうというレベルにとどめておくことにする。

方 法

被験者 磯崎・高橋 (1988) と同一の愛知県内公立小学校 5 年生 135 名および公立中学校 2 年生 120 名。

手続き 磯崎・高橋 (1988) の研究で行われた調査 (小学生は 1 学期の 6 月、中学生は 5 月) の約 10 か月後 (3 学期の 3 月)、その同一対象者に先の研究と同様に以下の調査を実施した。調査は、筆者と調査手順を習知していた大学生 4 名により行われた。

データの収集は 2 度にわたって行われ、いずれも各クラス単位で質問紙を配布し、集団で一斉に実施した。まず、はじめの調査は、教科の個人にとっての関与度、他者との心理的近さ、個人のパーソナリティを測定するために行われた。

関与度の測定 質問紙により教科名を提示し、“誰にも負けたくないと思う” 教科 2 科目 (高関与科目)、“負けても気にならない” 教科 2 科目 (低関与科目) をそれぞれあげさせた。

心理的近さの測定 質問紙により“学校にいるときクラスのなかで” “一番いっしょにいたい” 人 (心理的に近い他者)、“一番いっしょにいたくない” 人 (心理的に遠い他者) をそれぞれあげさせた。後者の場合、強制は避けるようにした。また、劣等感や内 (外) 向性などのパーソナリティ特性との関係を見るため、中学生には TK 式 VAT (中学生以上対象: 田研出版) を実施した。小学生には、これに対応した検査が入手できないため、Y-G 性格検査 (小学 2 年—6 年生用: 竹井機器工業) で代替し実施した。

そして、この約 1 週間後、被験者に、高低両関与科目についての成績の自己評定、および心理的に近い・遠い他者についての成績の評定を求めた (すべて 5 段階評定)。あわせて被験者の実際の成績の記入 (5 段階評価) を担任教師に依頼した。

結 果

データの分析は、以下の基準によって行われた。関与度は、“誰にも負けたくないと思う” 2 教科を高関与科目、“負けても気にならない” 2 教科を低関与科目とし、その平均値を分析に用いた。また、心理的近さは、“一番いっしょにいたい” 人を心理的に近い他者、“一番い

っしょにいたくない”人を心理的に遠い他者とした。なお、時系列的变化については、磯崎・高橋(1988)と今回のいずれの調査においても、基本的な分析に必要な回答が得られた小学校5年生99名(男50名,女49名),中学校2年生53名(男28名,女25名)を分析の対象とした。したがって、以下に述べる1回目の結果は、磯崎・高橋(1988)で得られたデータを共用している。ただし、磯崎・高橋(1988)の研究では、自尊心の高低との関連をみているため、自尊心が中程度の被験者群が除外されている。したがって、本研究では、磯崎・高橋(1988)で得られた有効データをすべて用いることにした。そして、今回の調査で得られたデータ(以下に述べる2回目の結果)とあわせ、同一対象者での比較が可能な限り分析の対象とした。また、結果の記述はできるだけ必要最小限にとどめた。

学業成績評定の全体的変化 1回目と2回目の全体の

結果を Figure 1 に示した。

自己と心理的に近い他者 1回目は、学年(小,中)×性(男,女)×関与度(高,低)×評定対象(自己,心理的に近い他者)の分散分析(篠原,1986,SPF pq. ru design)の結果、関与度と評定対象の交互作用が有意であった($F(1,148)=84.60, p<.001$)。仮説どおり、高関与科目で自己が心理的に近い他者よりすぐれていると認知し($F(1,148)=6.15, p<.05$)、低関与科目で、自己よりも心理的に近い他者がすぐれていると認知していた($F(1,148)=81.51, p<.001$, 篠原,1984,SPF pq. r design による)。この傾向は、性別では男子、学年別では小学生で強い[いずれも高関与科目で $p<.01$ (自己>他者),低関与科目で $p<.001$ (自己<他者),SPF p. q design による(篠原,1984)]。

2回目は、同様の分析において、関与度と評定対象の交互作用はみられたが($F(1,148)=54.89, p<.001$)、高関

Figure 1. Students' ratings of performance of self, close classmate, and distant classmate on subjects the students designated as highly and lowly relevant to their self-definition.

Figure 2. Actual grades of self, close classmate, and distant classmate on subjects the students designated as highly and lowly relevant to their self-definition.

与科目で、自己と心理的に近い他者との間で差はみられない。ただし、女子および学年別では中学生の場合、自己が心理的に近い他者よりもすぐれていると認知する傾向にある（それぞれ $p < .05$, $p < .10$ ）。低関与科目においては、自己よりも心理的に近い他者がすぐれていると認知していた ($F(1, 148) = 84.24$, $p < .001$)。

心理的に近い他者と遠い他者 先と同様の分析の結果、1回目と2回目のいずれにおいても、高関与科目において、心理的に近い他者を心理的に遠い他者よりもすぐれていると認知していた（いずれも $p < .001$ ）。低関与科目においても、心理的に近い他者を遠い他者よりもすぐれていると認知していた（いずれも $p < .001$ ）。

実際の学業成績の全体的変化 ここでは、実際の成績の分析に関わるすべてのデータが得られた151名[小学生99名(男50名, 女49名), 中学生52名(男28名, 女24名)]を分析の対象にした。なお、2回目のデータ分析には、2学期の成績を用いた。結果を Figure 2 に示した。

自己と心理的に近い他者 先と同様の分散分析の結果、関与度と評定対象の交互作用は、1回目、2回目いずれも有意であった（1回目: $F(1, 147) = 38.76$, $p < .001$, 2回目: $F(1, 147) = 45.53$, $p < .001$ ）。高関与科目において自己の成績が心理的に近い他者よりもすぐれ（1回目: $F(1, 147) = 3.89$, $p < .05$, 2回目: $F(1, 147) = 4.04$, $p < .05$ ）、低関与科目では心理的に近い他者が自己よりもすぐれていた（1回目: $F(1, 147) = 12.22$, $p < .01$, 2回目: $F(1, 147) = 15.14$, $p < .001$ ）。1, 2回目とも仮説どおりの結果であり、男女で大きな差はみられない。

心理的に近い他者と遠い他者 先と同様の分析の結果、高関与科目において、1回目、2回目とも、心理的に近い他者の実際の成績が遠い他者の実際の成績よりもすぐれていた（いずれも $p < .001$ ）。低関与科目においても1回目、2回目とも、心理的に近い他者が遠い他者よ

Table 1
Pattern of self-evaluation maintenance
strategy (actual grades)

Strategy	Change	Interaction of relevance and targets (F -value)	
		1st	2nd
A ($n=5$)	closeness (C)	6.68*	6.55*
B ($n=15$)	highly relevant subjects (R)	10.17**	8.86**
C ($n=12$)	actual grades (P) on highly relevant subjects	10.58**	ns
D ($n=13$)	(C) and (R)	ns	3.13+
E ($n=9$)	(C) and (P)	13.70**	4.70*
F ($n=31$)	(R) and (P)	ns	6.12*
G ($n=61$)	(C), (R) and (P)	10.66**	16.23***
H ($n=5$)	remain unchanged	ns	ns

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

りもすぐれていた（いずれも $p < .001$ ）。

実際の学業成績における自己評価維持方略パターン 分析対象は、友人の成績を含むすべてのデータが得られた151名である。自己評価維持の各方略パターン（8通り）ごとの人数、関与度（高、低）と評定対象（自己、心理的に近い他者）の交互作用の有意性 [SPF 1. qr design (篠原, 1986) による] を Table 1 に示した。各方略パターン別の自己と心理的に近い他者の実際の成績 (CRP すべて変えていない方略 H を除く) を示したのが Figure 3 である。ここで例えば、1(A) は、方略 A を用いた群の1回目、また 2(A) は同じ群の2回目のそれぞれ自己と心理的に近い他者の実際の成績を示している（以下同様である）。なお、こうした方略の使用には、と

Figure 3. Actual grades of self and close classmate on subjects the students designated as highly and lowly relevant to their self-definition, in each self-evaluation maintenance strategy.

Table 2
Pattern of self-evaluation maintenance
strategy (ratings)

Strategy	Change	Interaction of relevance and targets (<i>F</i> -value)	
		1st	2nd
A (<i>n</i> =3)	closeness(C)	<i>ns</i>	6.94*
B (<i>n</i> =13)	highly relevant subjects(R)	14.73**	5.83*
C (<i>n</i> =8)	ratings(P) on highly relevant subjects	6.32*	<i>ns</i>
D (<i>n</i> =12)	(C) and (R)	<i>ns</i>	<i>ns</i>
E (<i>n</i> =12)	(C) and (P)	14.90**	5.44*
F (<i>n</i> =33)	(R) and (P)	4.91*	12.00**
G (<i>n</i> =61)	(C), (R) and (P)	25.14***	33.49***
H (<i>n</i> =10)	remain unchanged	6.13*	8.27**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

くに顕著な男女差, 学年差はみられなかった。

Table 1 および Figure 3 より, 方略 G, F は, 自己評価維持により有効であること, 逆に, 方略 C は, 自己評価維持にマイナスであることがわかる。

学業成績判定における自己評価維持方略パターン ここでは, 高関与科目での成績の評定を変える場合が方略 C になる (その他は, 実際の成績の方略パターンと同じ)。各方略パターン別の人数と SPF 1. qr design 分析による関与度 (高, 低) と評定対象 (自己, 心理的に近い他者) の交互作用の有意性を Table 2 に, そして自己と心理的に近い他者の学業成績の評定値を Figure 4 に示した。方略 A, B が, 成績評定で比較的有效といえる。**パーソナリティ特性と自己評価維持機制** ここでは特

に, 劣等感, 内 (外) 向性, 神経質などのパーソナリティ特性と自己評価維持機制との関連について検討する。分析は, 基本的な回答を満たした有効回答者小学生 114 名 (男 53 名, 女 61 名), 中学生 77 名 (男 38 名, 女 39 名) を対象とした。実際の成績は 2 学期のものをを用いた。なお, 結果の表示は必要最小限にとどめた。

小学生 Y-G 性格検査の各尺度の標準得点に基づき, 1, 2 点を L 群, 3 点を M 群, 4, 5 点を H 群として, 各群ごとに, 性 (男, 女) × 関与度 (高, 低) × 評定対象 (自己, 心理的に近い他者) の分散分析 (SPF p. q r design, 篠原, 1986) を行った。

学業成績の評定に関する結果および関与度と評定対象の交互作用の有意性を Table 3 に示した。劣等感尺度の M 群において, 高関与科目で自己が心理的に近い他者よりすぐれ ($p < .05$), 低関与科目で心理的に近い他者が自己よりすぐれている ($p < .001$) と評定していた [SPF p. q design 分析 (篠原, 1984) による]。同様な分析で, 思考的外向尺度では, 特に H 群において, モデルのあてはまりがよい [高関与科目: 自己 > 心理的に近い他者 ($p < .10$), 低関与科目: 心理的に近い他者 > 自己 ($p < .05$)]。社会的外向尺度では M 群においてモデルのあてはまりがよい [高関与科目: 自己 > 心理的に近い他者 ($p < .10$), 低関与科目: 心理的に近い他者 > 自己 ($p < .001$)]。実際の学業成績の場合, 評定値ほどの明確な関連はみられなかった。

中学生 TK 式 VAT は, 劣等感, 神経質各尺度の評定段階 1—3 点を H 群, 4 点を M 群, 5—7 点を L 群とした。また, 社会的外向と思考的外向を合わせた一般的外向尺度については, 評価段階 1—3 点を L 群, 4 点を M 群, 5—7 点を H 群とした。

学業成績の評定について先と同様の分析を行った。劣等感では H, M, L 群で顕著な差はみられない。一般的外向では, H 群のあてはまりが比較的良好 (高関与科目

Figure 4. Students' ratings of performance of self and close classmate on subjects the students designated as highly and lowly relevant to their self-definition, in each self-evaluation maintenance strategy.

Table 3
Students' ratings of performance of self and close classmate on subjects, the students designated as highly relevant (RH) and lowly relevant (RL) to their self-definition, in each subscale of the Y-G personality test

	Inferiority feeling						Thinking extraversion					
	H-group (n=28)		M-group (n=64)		L-group (n=22)		H-group (n=22)		M-group (n=42)		L-group (n=50)	
	RH	RL	RH	RL	RH	RL	RH	RL	RH	RL	RH	RL
Self	3.72	2.46	3.91	2.91	3.96	2.95	4.16	2.90	3.93	2.77	3.71	2.76
Close classmate	3.84	3.48	3.62	3.43	3.83	3.57	3.72	3.32	3.71	3.57	3.70	3.48
Interaction of relevance and targets (<i>F</i> -value)	13.60**		33.24***		18.23**		9.24**		33.25***		31.27***	

Continued	Social extraversion					
	H-group (n=41)		M-group (n=61)		L-group (n=12)	
	RH	RL	RH	RL	RH	RL
Self	4.06	2.90	3.85	2.79	3.32	2.32
Close classmate	3.93	3.52	3.59	3.51	3.60	3.32
Interaction of relevance and targets (<i>F</i> -value)	27.16***		44.91***		3.65†	

† $p < .10$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

Table 4
Actual grades of self and close classmate on subjects, the students designated as highly relevant (RH) and lowly relevant (RL) to their self-definition, in each subscale of the TK form of VAT

	Inferiority feeling						General extraversion					
	H-group (n=32)		M-group (n=23)		L-group (n=22)		H-group (n=20)		M-group (n=33)		L-group (n=24)	
	RH	RL	RH	RL	RH	RL	RH	RL	RH	RL	RH	RL
Self	3.27	2.54	3.75	3.08	3.67	2.92	3.69	2.83	3.60	2.99	3.42	2.67
Close classmate	3.09	2.98	3.32	3.17	2.88	2.89	2.95	2.88	3.22	3.14	3.23	3.14
Interaction of relevance and targets (<i>F</i> -value)	12.19**		4.97*		12.74**		33.78***		10.55**		6.00*	

Continued	Nervousness					
	H-group (n=34)		M-group (n=28)		L-group (n=15)	
	RH	RL	RH	RL	RH	RL
Self	3.51	2.85	3.75	3.03	3.35	2.49
Close classmate	2.91	3.10	3.45	3.11	3.24	2.89
Interaction of relevance and targets (<i>F</i> -value)	23.86***		4.13*		7.00*	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

の自己と心理的に近い他者： $\bar{x}=3.68$ と $\bar{x}=3.40$ 、低関与科目の自己と心理的に近い他者： $\bar{x}=2.90$ と $\bar{x}=3.30$ 、交互作用は $p<.01$ ）。その他はあまり明確な関連がみられない。また、実際の学業成績の結果（Table 4）をみると、劣等感の M 群、H 群、一般的外向の M 群、L 群、神経質尺度の H 群で比較的モデルのあてはまりがよい。

考 察

時系列的にみると、学業成績の評定よりも実際の成績において自己評価を維持しようとする傾向のあることがわかる。したがって、認知による自己評価の維持は、学期が進むにつれて弱まることになる。これは、関与度の高い科目においても、自己と友人を類似したものとして知覚しようとするだけでなく、友人のよさをより積極的に評価しようとする傾向、つまり、親密さや好意性がより強くあらわれた結果と解釈される。その一方で、実際の学業成績で自己評価の維持をはかろうとしている点は興味深い。実際の成績こそが、児童・生徒にとってより重要な意味をもっていることが示唆される。特に、中学生の場合、高関与科目において、1回目の自己と心理的に近い他者との差の傾向（ $p<.10$ ）が、2回目により明瞭なものとなっている（ $p<.05$ ）。その意味で、こうした推測は中学生によりあてはまるように思われる。

こうした1回目と2回目の違いについては、学年の比較的是じめの時期と学年のおわり頃という状況の違い、およびそれともなう友人関係の進展の度合いが関係している可能性がある。つまり、学年のはじめは、友人と自分のよさを比較的素直に認知しているのに対し、時間の経過とともに友人との結びつきや一体感を強く感じ、友人をより好意的にとらえようとしたと推測される。

そのことが、自己にとって関与度の高い科目においても、友人を自己より過大評価することにつながっているように思われる。こうした友人を高く評価する点は、Tesser et al. (1984) の結果と明確に異なっている。しかし、その一方で、実際の成績において自己評価を維持しようとしており、自己と友人との間にある種のバランスをはかろうとする心理がうかがわれる。

心理的に近い他者と遠い他者とのについては、1回目と2回目いずれもモデルの予測は支持されない。フィールドでは、高低両関与科目において、心理的に近い他者が遠い他者より実際の成績がすぐれており、またそのように評定されることが確認された。心理的に遠い他者であれば、高関与科目で友人よりすぐれていても自己にとって脅威にはならないというモデルの仮定は、フィールドでは無理があるように思われる。心理的に遠い他者の学業成績は、自己にとってもつ意味が相対的に小さいように思われる。この点は、心理的に遠い他者を“いっし

よにいたくない”他者という形で設定していることも関係しているかもしれない。

自己評価維持で用いられる方略パターンは多様であり、実際の成績の場合、複数の要因の組み合わせによって自己評価維持のなされる傾向が示された。事実、有効な方略である方略 G と F を用いた人数が全体の6割に達している。友人選択と学業成績および教科の関与度が、相互に密接に関わって力動的に変化し、自己評価の維持がなされているといえる。

そうした中で、実際の成績のみを変えるという方略の使用は、自己評価の維持にとって困難な方略であることがわかる。自己にとって関与度の高い（自己規定上重要な）科目の成績は、通常十分な努力がなされていることが多く、容易には改善が難しいと推測される。逆に成績の評定においては、単一の要素を変える方略によって自己評価の維持が可能となるような傾向にある。これに対し、成績評定（認知）の場合には、比較的単純な方略で対応可能といえるかもしれない。この点、実際の成績での方略の有効性とは対照的である。

また、自己評価維持の方略の使用法と実際の成績との間には、一定の関係があるように思われる。つまり、心理的近さ、学業成績、関与度のいずれかを単一に変える方略を用いる群は、概して高関与科目における自己の実際の成績がすぐれている（Figure 3）。これに対し、方略 D や G などに典型的に示されるように、複数の要素を変える群は、方略 E を用いる群を除き自己の実際の成績はそれほど高くない。これは、高関与科目における実際の成績の比較的よい群が、単一の要素を変えるだけで自己評価を維持しようとしがちであることを示している。実際、方略 C を除き、単一の要素を変えるだけで自己評価の維持が可能となっている。

パーソナリティ特性と自己評価維持との関連についてみると、小学生の場合、実際の成績よりも学業成績の評定、つまり認知においてより関連がみられるようである。個別のパーソナリティ特性との関連では、劣等感や社会的外向の中間群、思考的外向の高い群で、自己評価維持傾向が強くみられた。中学生は、小学生とは逆に実際の成績との関連が強くみられている点特徴的である。特に、劣等感と一般的外向の中間群、神経質の程度の高い群で、実際の成績におけるモデルのあてはまりがよい。

また、小学生の社会的外向の低い群や中学生の一般的外向の低い群の評定結果にみられるように、自己評価維持の一方の過程（この場合、反映過程）のみが強くみられるパーソナリティ特性もある。この場合、友人と比較して自己のよさを積極的に認知していない子どもが、消極的、閉鎖的な傾向を示しがちであることが示唆される。

この他、劣等感の低い生徒は、それが中程度の生徒の

結果と比べ、自己にとって関与度の高い科目で、自己よりもかなり低い成績をとっている他者を友人として選択していることがわかる (Table 4)。つまり、自己の優位性を重視した友人選択を行っていることが示唆される。こうしたパーソナリティ特性と自己評価維持との関連は、児童・生徒の対人行動を理解する上で興味深い視点を提供しているように思われる。今後は、劣等感や内(外)向性以外の他の特性との関連も検討する必要がある。また、小学生と中学生とで用いられたパーソナリティ検査が同一のものではなかった点も注意しておかなければならない。

以上、本研究では、児童・生徒の友人選択と学校での勉学が相互に密接に関わっていること、そして、そうした中で、児童・生徒が自己のよさを発揮し、自己のよさを感じとれるような行動を志向しようとしていることが示唆された。児童・生徒の自己評価維持機制と学校生活の充足感の関連については今後の検討課題である。

引用文献

- フェスティンガー L. 末永俊郎 (監訳) 1965 認知的不協和の理論 誠信書房
(Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance*. Stanford: Stanford University Press.)
- ハイダー F. 大橋正夫 (訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房
(Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.)
- 磯崎三喜年 1989 社会的比較と公平 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編) 社会心理学パースペクティブ 1 個人から他者へ 誠信書房 Pp. 184-206.
- 磯崎三喜年・高橋 超 1988 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, 59, 113-119.
- 篠原弘章 1984 行動科学の BASIC 第2巻 実験計画法 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1986 行動科学の BASIC 第3巻 続実験計画法 ナカニシヤ出版
- Tesser, A. 1984 Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and for development. In J.C. Masters & K. Yarkin-Levin (Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. New York: Academic Press. Pp. 271-299.
- Tesser, A., & Campbell, J. 1983 Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls & A. Greenwald. (Eds.), *Social psychological perspective on the self*. Vol. 2. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 1-31.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.
- Tesser, A., Millar, M., & Moore, J. 1988 Some affective consequences of social comparison and reflection processes: The pain and pleasure of being close. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 49-61.
- 山口 勲 1990 “自己の姿への評価”の段階 中村陽吉 (編) “自己過程”の社会心理学 東京大学出版会 Pp. 111-142.

—1991. 8. 12. 受稿, 1992. 9. 5. 受理—